

女性の日々(その二)

「かあ」の部

何人か子供が出来て、小学校やその上の高等科や稀には中学校に行くようになる、貫禄も出てきて、一家の主婦になる。

しかも娘も嫁に行く様になると、時期の着物や嫁入りの準備など、常に心がけていなければならぬので、うっかりしているような訳にはいかない。

また、添いあいも(旦那)も、それなりの社会的地位も出来るであろうから、その面も油断できない。

「かあ」になつてから、機場に勤めるよりは、経験のある人は寧ろ「引き込み」などの、家庭で出来る副業をするようになる。

福嶋の昔は、息子が成人に達すると、神社に「上げもの」をするとか、娘の厄年に「あげもの」をしたり、付き合いだけでも大変であった。

早くに子供が出来た「かあ」は、成人に達した子供が、兵隊検査に合格すると兵役の義務が待っている。

さきの、太平洋戦争では、何人もの子供を戦地に送り出し、何人もの還つて来なかつた、大事な息子を持った母親がいた。

「苦しい」とも言えず、夜な夜な枕を濡らしたであろう、「おかあ」を私は何人も知っている。

私個人の事であるが、母は、一時期、三人の息子を戦地に送り、更に四男を軍需工場に、挺身隊として徴用された。

母は亡くなる前、とてもコップで酒を呑みたがった、その訳は、配給で酒が手に入ると神棚に飾り、誰にもやらずに自分で飲んだと聞いた。

四人の「武運を祈つての」所作で会つたらしい。

悲しくもつらい時期を、歯を食い縛つて過ごした、母がこの年になると思い出されて、可哀想である。

私だけの思い出でなく、総ての福嶋の「かあ」は、この経験を持つて今、極楽にいるだろうか。

いずめの話(藁製保育器)

「いずめ」という、藁製品の保育器が何処の家庭にもあつたと思う。

前頁に、囲炉裏と祖父・祖母と孫たちの、微笑ましい団欒の写真を見ていただきたい、一番奥に見えるのは「いずめの子供」である。

「いずめ」に入れられた幼児は、小便など吸い込んでくれるように股間に大きな「灰袋」を挟まれていた、その上、足や胴の間に、ぼろ布(ぼて)を隙間もなく詰められているので身動きできない状態で、そのまま母が帰つて来るまで、過ごさなければならぬ、幼児は、母が帰つてくると「泣きぬれて、眠つて」いるのが普通であつた。

私の母は、農家の「灰室」に灰をよく貰いに行つたという記憶がある。「いずめ」というのは「居詰め」からの語ではないかと思つている。